

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人
小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707

E-mail kohitsuji@imix.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松 義人

印刷所：聖隷サービス(有)

定 価：一部 30 円

2010年10月20日

第 330 号

子どもの施設見学記

理事長

稲松 義人

名古屋キリスト教社会館という施設があります。先月、創立50周年の記念会が開催され、私も案内いただき出席しました。この施設は、51年前、未曾有の大災害となった伊勢湾台風のとき、名古屋市内のキリスト教会が協力して救援活動をしたことに端を発します。その後社会福祉法人を設立し、被災後の福祉活動を展開します。保育の仕事からはじめ、障害児への支援、障害者への支援、高齢者への支援などに広がっています。それぞれの仕事は、それぞれの法律や制度に立っているのですが、基本は地域社会に根ざし、新たに直面したニーズに応じて展開してきた福祉活動であることを教えられました。法律や制度に合わせて事業展開するのと同じことをしているようで、根本的な違いがあると感じます。

いことになりません。あるいは子どもたちをこの枠組みの生活に当てはめようと考えることになりません。直接支援する職員の配置基準が決められており、制度としてはそれに見合う報酬が保障されます。世界に視野を広げると日本でこれが保障されていることはある意味評価すべきことなのでしょう。しかし、枠組みにはまらない子どもたちは受け入れ困難となります。あるいは想定された以上の配慮をしても経済的な保障はありません。やりたくても制度的に認められないために断念せざるを得ないこともあります。子どもたちを中心に発想するときには、受け入れられるために適用した制度を、何とか拡大解釈しながら、子どもたちのニーズにあった支援をします。身勝手な運営にならないように謙虚にならなければなりません。このような開拓的な仕事によって、法整備が進み、制度が整えられていくことにもなります。よりよい福祉の実践を支える仕組み（枠組み）づくりは、現場から発想しなければならぬと思っています。

先日、金沢市にある児童養護施設梅光児童園と梅光保育園を見学させていただきました。機会がありました。地図を頼りに、梅光保育園はすぐに見つかりました。梅光児童園はすぐに見つかりました。梅光児童園の入口が分からず、保育園の職員さんに教えてもらってようやく施設長さんを訪ねることができました。子どもたちの居住の場は、数名ずつが暮らす普通の「家」のようになっており、周囲が住宅地であるために、町の風景に溶け込んでいます。施設の周囲に住宅が増えてきたのではなく、昔からの市街地の中に立地していることにも感銘を受けました。三方原スクエアのように建物職員動線が繋がっていることもなく、会計的にもそれぞれの小舎ごとにやりくりが任されており、可能な限り普通の家庭をモデルにし、家族のような生活を目指していると感じました。施設の周囲には、近隣から保育園に通ってくる幼児の他に、学童保育のための施設もあり、地域に根差した入所施設であると感じました。

家族とは何かという命題に、ある研究では「家族とは、第一次福祉共同体である」という結論にまとめられています。たという話を聞いたことがあります。だとすると、家族が崩壊していくなかで、それを補う社会的支援をいくら整備しても、到底補いきれるものではないのではないのでしょうか。

家族を支えるための地域のニーズに応えるのが社会館であり、子どもたちを家族の代わりに支える社会的養護のあり方が小舎制の施設であり、里親制度であるのだらうと思います。

コミュニティの再生を掲げる小羊学園の今後の事業展開のために、大変参考になる実践を実際に見せていただいたことに感謝しています。

子どもたちの成長とともに

三方原スクエア児童部の実践

学齢期の支援で大切なこと

児童部主任 濱田 裕子

■ 日々の生活

児童部は現在4ユニット(内1ユニットは児童籍の過齢者)に分かれて、小学生3名、中学生1名、高校生8名の計12名の学齢児が生活しています。この学齢児を、移転改築前(H20年細江町から三方原町へ移転)と同じ、地域にある学校に通わせたいという想いから、現在も三方原スクエアから小中学生は浜北特別支援学校へ(スクールバス利用)、高校生は浜松特別支援学校へ(施設の送迎車両利用)毎日送り出しています。

学校へ通う子供たちを支援する児童部としては各学校との連携は必要不可欠であり、体調管理や日々の持ち物、行事の確認、基本的な生活の様子など多くの情報交換を毎日行っています。また、定期的に各児童のカンファレンスの機会を持ち、情報確認や現状の課題・取り組みに対する評価の共有を行っています。特に高等部卒業後の進路に関するカンファレンスについては学校や各関係機関との情報交換が急務となり、ご家族を交えた3者面談なども行っ



ています。

実際の子どもの達の生活を簡単に説明するならば、大変忙しいという言葉に尽きると思います。平日は朝6時起床で1日がスタート。朝食を済ませ、7時15分～30分には登校となります。下校時間は学年や曜日で異なりますが14時～16時となり、帰ってきてからは翌日の学校準備や夕食・入浴を行い、20時を目安に消灯という学校生活ならではの日課をこなしています。

■ 児童期に関わるポイント

日常支援については、各ケース担当が支援内容を計画し実践していますが、共通支援としては「基本的な生活の確立」「社会性」「自立」の3点を意識しています。例えば、配膳や掃除など自分で行える内容を増やしていく、衣類をタンスの中に分けながら片付け整頓する、交通ルールを守る、挨拶やお礼を言えるようになる、仲間との生活の中で役割を担うなどです。これは今後社会に巣立っていく際に必要な事柄と

なります。また、平日の支援とは別に週末や休暇期間を利用して、子どもが楽しみながら学べられるような余暇的な取り組みも行い、今年の夏休みには個々の興味に沿って、成長過程の中で体験したり経験してもらいたい事を挙げて個別外出を実施しました。子ども達の新たな一面が引き出され、社会の中での適応力を見極める良い機会となったことは勿論ですが、日々支援に明け暮れる支援者と子ども達との楽しみの共有が図れた事が何よりの成果であったと感じています。スクエア外での子ども達の様子を知る事で、今後の支援のヒントを得られる事も期待しています。

日々の生活の中での成長や課題については、月に2回の会議で協議を重ね、新たな支援内容の決定や、個々の現状についての共通理解を行っています。しかし、子どもの生活(行動、精神面)の変化は目まぐるしく、会議以外での職員間のコミュニケーションが大変重要になります。日々の職員間の会話の中から子どもの現状や課題が明確になり、新たな支援方法を見出す事も少なくありません。このように職員間の連携・伝達・報告・チームワークがより求められるのが現在の児童部です。

■ 大切にしたいこと

生活の中において私達支援者が大切にしている事は多いのですが、特に子どもの将来像を捉えながら現在の支援

を組み立てて行く事は大切にしたいと思っています。5年後、10年後、20年後にこんな生活を送る事ができるのは?送らせてあげたいという想いから客観的な視点に立ち、そのために今何が必要かを一人ひとりの子どもに置き換えて見立てを行う。三方原スクエアを巣立っていく事で、子ども達の人生のステップアップに確実に繋がるようイメージして支援を行っています。

また、子どもの支援と平行して、家族への支援も重要であると考えています。子どもの成長や生活の安定が徐々に図られていく様子を、帰宅時(面会時)や定期的な面談の中で、細かく丁寧にご家族に説明、報告、相談を行えるよう努力しています。様々な事情で離れて生活せざるを得ない家族の時間を私達支援者が埋めていく事が児童部の特性上、重要視されなければならぬと感じているからです。少しの可能性があるならば、止まってしまった家族の時間を再度取り戻すことができるよう個々の子どもとご家族への支援を行っています。

近年、入所児童の障がい像が少しずつ変化してきており、比較的理解力の高い児童が半数以上を占めているのが現状です。支援者も子どもと向き合う中から学ぶ事も多く、支援について更に勉強する機会を持たなければならぬと痛感しています。しかし、どのような子どもであってもその子の事を受

け入れ、向き合う姿勢は変わりません。相手を知り、支援者間で協議しチームで支援していく。歴代の小羊学園の職員がそうであったように、時代や形が変わっても今の「三方原スクエア」を担っている私達がこの仕事に「誇り」を持ち、ここでの生活や支援を通して子ども達の現在・未来が充実し、幸せだと感じられるものに繋がっていくことができればと願っています。



こどもの育ち、わたしの育ち

児童指導員 伊神 あゆ香

■職員として働くようになって

私が小羊学園を訪れたのは、大学の実習でお世話になった福祉施設職員の方に紹介された事がきっかけです。知的障がいについて触れる程度にしか学んでいなかった私ですが、初めて見学をしたその日に「私はこの施設で働くな」と直感しました。

三方原スクエア児童部の職員になって現在1年半が経ちます。就職当初、いぎユニットに入ると今まで会った事

がなくボランティアで関わった事も無い学齢の子ども達ばかり。まずは名前と顔を一致させる事、生活の流れ、雑務を覚える事に必死でしたが、少しずつ子ども達と関わり「お姉さん」と慕ってくれる事がまずは嬉しい事でした。

しかし日を重ねると、私に対する子ども達の言動と他職員に対する言動の違いを感じたのです。トイレに誘ってもなかなか動かない、手をつなぐにも振り払われてしまう。どうして私の時だけ？と思う事もありましたが、私がいずれ子ども達を知ろうと思うように子ども達の事を知ろうとしているのではと教えていただき、それらの言動を少し客観的に見る事ができるようになりました。それは言葉で表現する事が苦手な子ども達が考えついたコミュニケーション手段なのかもしれません。

■葛藤から得たもの

1年目の秋頃までは私にとって辛い期間でした。体格のいい男の子達と関わる中で、時には理解しがたい行動に遭遇する事もあります。大勢の人の目の前で髪を引っ張られたり、叩かれたり。散歩に出れば毎回の様に手や腕に爪の痕や青あざができる。全ての行動に何かしらの理由があっても、どうしてもその子に対して恐怖心が沸いてきてしまうのです。自分がそのユニットの担当日だと分かると憂鬱で余裕はなく、ただ当たり障りがないように関わるのが精一杯でした。



方が悪くて情緒不安定になっているのではと考えるようになりました。私はその子が今何に苦しみ、何を思っているのかまで汲み取ってあげることができず、表面的な解決方法しか考えていなかったように思います。

今年も不安定な時期がありました。職員間で話し合い、私自身も1年目に比べると様々な視点で見ることができず不安定さは今ありません。

■ともに成長したい

知的障がいと一言で表しても一人ひとり性格や特徴も違い、毎日違った表情、行動を見せてくれます。ボランティアとして小羊学園の人たちと関わった時から、障がい児・者である前に一人の人間であることは常に念頭にありますが、関わりの中でどこまで手助けをして良いか迷う事も多く、もしかしたらできる可能性を狭めてしまっているのではないかと、ふと思うことがあります。まだまだ勉強不足で支援方法や関わり方等学ばなければいけない事ばかりですが、子ども達と一緒に成長していきたいです。子ども達によって人として、支援員として成長させられている事の方が多いように感じています。

最後に、スクエアや学校、家庭で見せてくれるちょっとした成長を目にした時。笑顔、泣き顔、寝顔を見た時。そして、今この文章を書きながら、やはり私はこの子ども達と関わる事が好きなのだと思えます。

熱き戦い

中秋の晴天に恵まれ、第2回小羊学園ふれあい運動会が、10月8日(金)に浜北区のグリーンアリーナで行われました。

ふれあい運動会は、法人内の日中活動事業所間の交流と、運動を楽しむことを目的に昨年からはまりました。

参加事業所は三方原スクエア、小羊デイケアホーム、マルカート、オリーブの樹に加え、今年は「ばびるす」の子どもたちも見学に訪れました。

各事業所では、おそろいのTシャツを用意したり、旗や応援グッズを作成して、期待に胸を膨らませてこの日を迎えました。



開会式では、昨年優勝の小羊デイケアホームから優勝杯が返還され、その後、三方原スクエアの村田さん・白石さんが選手宣誓を行い、競技がスタートしました。

午前中の種目は徒競争+車椅子競争、

パン喰い競争が行われました。徒競争は個人表彰され、完走者には、表彰シールが贈られました。パン喰い競争は、オリーブの樹が販売しているパンを使用し、皆さん苦戦しながらもパンをくわえていましたよ。

お昼休みには、魅惑的倶楽部(エキゾチッククラブ)によるダンス&ミュージックが披露され、みんなで楽しく踊りました。

午後は、団体競技の部です。各事業所の名誉をかけた熱き戦いのはじまりです。玉転がしリレー・つなひき・男女混合リレーの順に競技が進められ、最終的に戦いを制したのは、マルカートでした。

閉会式では、優勝杯がマルカートに授与され、みんなは大喜びでした。

今年で2回目となった小羊学園ふれあい運動会も盛大のうちに幕を閉じました。また、来年もこの地に、みんなが集まり楽しい一時を過ごしましょう。



宝石箱展

日時：12月1日(水)～12月12日(日)

10:00～17:00

会場：クリエート浜松3F

浜松市中区早馬町2-1(JR浜松駅より徒歩8分)

三方原スクエアで行っている絵画教室(講師：中道芳美先生)の作品が中心で、30点ほど展示されます。ぜひご来場ください。まるで絵がおしゃべりをしている、そんな気持ちにさせられます。決して上手な絵ではありません。でも、いい絵なのです。

小羊学園 公開講演会

「しょうがいしゃ施設生活の課題と地域移行」

講師：河東田 博 先生

立教大学コミュニティ福祉学部教授

日時：12月4日(土) 13:30～15:30

場所：聖隷クリストファー大学

1号館7F大教室(入場無料)

問合せ：三方原スクエア ☎414-1833

小羊学園を支える会

2010年度寄付金報告

9月受付分 210,000円(23件)
累計 2,666,912円(198件)

小羊学園への寄付金振込み先

(口座名義)「小羊学園を支える会」

郵便振替口座 00890-4-45415

りそな銀行浜松支店 (普通) 040005

静岡銀行細江支店 (普通) 043483

ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。下記へご連絡ください。

小羊学園を支える会事務局(鈴木)

編集後記

チリの銅鉱山採掘現場の落盤事故から、33人の作業員が救出され、奇跡の生還として世界的にライブ映像が放映されたのは、記憶に新しいことです。この事故は、鉱山の安全管理のずさんさが、起因として挙げられています。生存者確認後の対応に関してチリ政府のとった対応は評価されていました。

この落盤事故の救出までの経過を通して、家族愛や信仰の尊さを感じ、私たちの仕事に置き換え、小羊学園の理念である「迷える一匹の小羊」を改めて思い起こし、支えを必要とする人たちお一人おひとりに祝福があることを祈ってやみません。

徐々に寒さが身にしみてきます。どうぞお身体を大切に。